

教室の窓から

令和 5年
(2023年) 11月
来須 真紀

研究会の季節

秋が深まっています。秋といえば、読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋、天高く馬肥える秋、、、そして学校では、「研究会の秋」であることが多いです。。

研究会とは？

研究会って、何でしょう？いわゆる学会みたいな感じなのではありますが、学校独自の文化「授業研究会」というものが主流で、実際の授業を参観し、協議していくものです。

公開授業研究までの長い道のり

一般的に授業研究会を開催する学校は、年度初め、大きい研究会になると1年前2年前3年前からきまっています。そして、限定された教科について研究していく目的のもの、生徒指導や人権教育のように教科は限定されていないが視点や取り組みが限定されているもの、中学校区として連携協議が目的のものとな様々な目的のものがあります。そのほかにも〇〇指定校みたいな教育委員会や文部科学省からの指定受け、何年間か研究しその成果を発表するといったものや学校が自主的に公開しているものもあります。ちなみに転勤の希望を書く際などは「〇〇学校は指定校受けているよ」「〇〇学校は、再来年全国大会だよ」とかいう情報が行きかい、そこへの希望は出したがらない人も中にはいます。

公開研究会だけじゃないよ校内研究会

公開研究会だけが授業研究会ではありません。大抵の学校には、「校内授業研究会」といものがあり、他校には公開はしないが、校内の先生に授業を公開し、協議していく研究会もあります。この研究については学校ごとに教科を決めている学校が多く、教科ごとの研究をしていく場合が多いです。

誰が公開するか問題

という、授業を公開する研究会が、実は年に2~3回は行われるのが一般的です。研究熱心な学校になると「一人1公開」とか「学年1公開」という学校もありますが、その年に2~3かい行われる公開授業研究を誰がやるのかは、毎年毎年、大きな波

紋を及ぼします。「若い人は、積極的にやって勉強すべきだよ」という人もいれば、「ある程度、脂ののった年齢の中間層がやって、若い人に背中を見せたらいい」という人もいれば、「やっぱりベテランがお手本を見せない」という人もいます。要するに「できればやりたくない。。。>>>という人が多いんですね。。。ごくまれに「やります!」とやる気を見せてくれる人もいますが。。。

なぜやりますって人がいない?

ではなぜやりたくないのでしょうか?それは、ズバリ「大変だから」です。授業を公開するとは、そこまでにとてつもない道のりがあるのです。

長い厳しい道のり

まず、授業研究をすると決まれば、どこの単元のどの時間を公開するのかと決めます。一人で決めるのではなく大抵「同じ学年の先生と相談して」決めます。公開するのに似合っている時間とふさわしくない時間というものがありますし、公開研究会の時期がシラバスでどのあたりなのかも考え、シラバスを調整していかないといけないからです。

次にするのは、公開研究会に向けて、クラスの状況を整えておくということを行います。特に全国大会のような大きい大会に向けてとなると、子どもたちの生活指導にも気合が入る学校も。。。

そして、研究会の時期が近くなると、大きな山場、「指導案」の作成に入ります。指導案とは、正式には「学習指導案」と言って子どもたちの状況やそれに基づいた指導の工夫や指導の計画単元の目標や計画評価基準規準などがまとめてあるいわゆる「企画書」になります。この「指導案」が。。。まず授業する教員は、この指導案のたたき台を作成し、同じ学年の先生方に渡し、直しや協議をしてもらいます。「この場面では、このような活動をした方がいい」「この場面ではこんな教材を使ったらどうか」「この流れで本当にいいのだろうか」とまあ、学年で長い時間をかけて、様々なことを議論します。その議論したことを元に授業する教員はもう一度指導案を書き直します。大体このやり取りが2~3回。学年で全員が納得するものができたら、お次は、研究担当と同じことをやり、管理職と同じことをやり、最後は研究会当日にお招きする指導助言者とも同じようなやり取りをする。。。というある意味無限ループ的な思考と作業を繰り返すのです。(このやり取りは、結構勉強になったりするのだが(来須私見)このやり取りが嫌で嫌で仕方ない人もたくさんいます。

ざっと、研究会について書いてみましたが、この一見めんどくさそうな研究会(めんどくささが伝わるように書いてしまったのだが)実は、教員にとっての授業の力をつける最短の手段だと私は思っています。続きは、また、次号で。。。